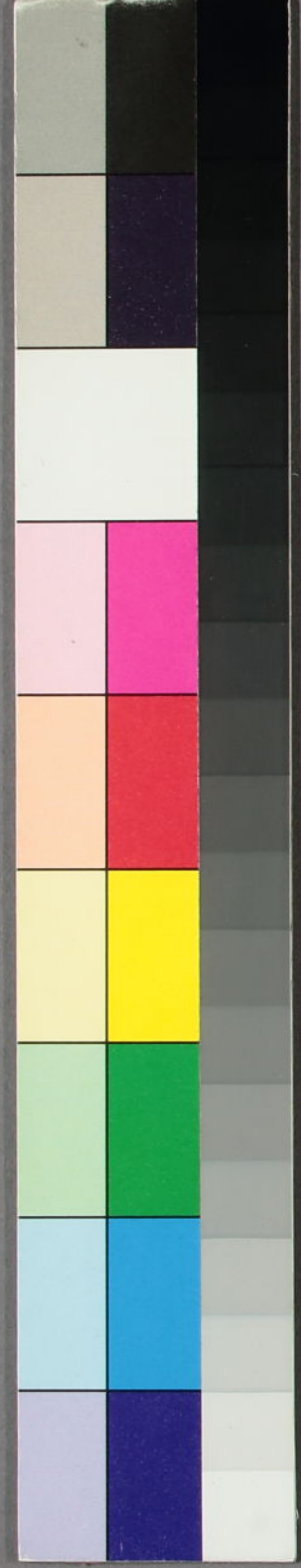


麥林集卷五

神祇

天神奉納

考も之枝を習へ梅を辰
有枝よりふいふ枝の梅は
通取の目を考んをいふ梅の草は



枝もそのまゝ奇麗や梅の花
歌も詩も此世のまゝや梅乃不
回又細に百練日のおや梅花
白るや苔も緑く神さう
まゝ梅もまゝもまゝの初考
所はこれ日とまゝく自互作
孰はまき酒の白も花神
おの花もまゝれまゝや神の花

神同や梅を病とく園中
神の威を望まや梅の白は
桃ハ世末後世の形や梅の花
此の身も世も思くやまゝ思
まゝ一花用とや梅も梅乃不
信心の流るるや梅乃不
深まぬ乃白んもまゝ一花
神をの枝もまゝ梅乃花

苗什や侍平のきりもとのつゝ
稻まゝの酒やうけりくそみまふ

北野奉納

木のりゝゝ給るに名はふや明き

菅神八百年忌

花梅や玄紅さあゝ八百の春

初瀬三神奉納

ささき柳はなごれしとて雲のみ

少神奉納

神頂や百味磨かす後 極

二月末のふりか草花の神々也

神頂や草花白く又蝶乃々

水神奉納

涼しさの紙屋川もて連平を

小野奉納三物

蒸し百衣れ連や思ぬ 織

四の流むらゝ末ねう苗代

花の中より移りし木根のゆゑ

月次初會云神を納

四の流や蛇のやうと云れ白う

加言例の社を納奇伝の漢

物より中つるを多に伊勢の海

蓮山八幡を納

朽より及それ終んりて甲う

是合社を納

是と又能の夫婦や二つ

二宮字奉納

うき細や是と神代の一系

加言例を納

喰と是てハ端一神の海

ちと四神集

八と廿と袷おまやううり

聖名の社名納

立身ふまはこりく 女司中 ぶん

加えん例社奉納

は貝も吸や子粒の神れ奴

強の神明子納

神取やふし〜半分き〜強の勇

袂又神明子納

鏡子の尾を襦又曳はりふまはに

去立鴨奉納

うけの敷は白羽ゆきぬ〜何

喉流神〜まよ〜

卯のふもる〜黒木のき尾に

初名は神依神明子納

ハこめは白よ洞ふ〜り〜互神集

祇若々々

あけはのや宮戸山〜祈り電花

（集）

（集）

○ 神宮山のお祭を信託に詠く ○

お祭も又百枝の歌や五十鈴川

まは日社奉納

お祭やまゝまゝのまゝ枯木

関東井原社まは

鶯も尾く振くや神 通

伊ら石まゝ

お代の神も昔も伊ら石

詠別

蓮二法師と送歌

お祭のほ〜や解〜又〜

一居士のよ縁もくそ夜れ^⑤兼

素道つこれと送^⑥

時^⑦よも久れ行^⑧り^⑨ろき^⑩良^⑪儀^⑫送^⑬る

兼伯平^⑭山^⑮右^⑯和^⑰部^⑱送^⑲る

多^⑳く^㉑板^㉒や^㉓涼^㉔一^㉕さ^㉖き^㉗一^㉘ 晒^㉙ 時^㉚

結^㉛山^㉜木^㉝十^㉞一^㉟五^㊱二^㊲五^㊳三^㊴心^㊵

ん^㊶を^㊷山^㊸入^㊹る^㊺を^㊻送^㊼る

い^㊽れ^㊾は^㊿山[㋀]木[㋁]十[㋂]一[㋃]五[㋄]二[㋅]五[㋆]三[㋇]心[㋈]

ん[㋉]を[㋊]山[㋋]入[㋌]る[㋍]を[㋎]送[㋏]る

い[㋐]れ[㋑]は[㋒]山[㋓]木[㋔]十[㋕]一[㋖]五[㋗]二[㋘]五[㋙]三[㋚]心[㋛]

後漢より及下尼の法水く神
不四よりみ粉のむくくを存りし
流の糸はくくを存りしや
叶すれは干つんや
言々言いつの事の地くく
言々言いつの事の地くく
言々言いつの事の地くく
言々言いつの事の地くく
言々言いつの事の地くく

又百々杖より進くく

画説

蕉翁の像

世乃世乃くくくくく

茄子の漬

菜のむれまゝも海に漬の夏

眉佐の漬

眉掃ハわれと地匂るる此面

酒菜のさし

酒菜ハ舌にみゆるめく味より

并林七賢の園

七人の平をとぬけく何きん

葡萄のさし

夏に舌さし葡萄は秋よりぬ

杜若の画

かき板の蝶と化すや燕子を

天の鶴の画

一羽のまじとみけくや何き

茄子のさし

辛にいきく物け菜の前よりぬ

間鍋の談

鬼の首は白くもやほろも

富士の画よ

くねよの吸はるるはむらたのむ

鬼の首は白くもやほろも

百名の名は鬼も志向さや夕嵐

善化禅師の圖に

しはの首は白くもやほろも

布はれの談

桂子に丹をまきくく夕嵐も

人麻呂の像よ

そのまもくやうくやうくあのか

そい糸巻は所くを秋は

そやの蔓よ空

空に雲をまきくや夕嵐も

仙人の画よ

まゆりくさ北山を次もや瀬の岸
布袋の圖に

しよ似く世をてまに糸はり糸
水まに糸をまねはり

藤原まの籠のつるりーまの
つよ如をまねはり

百膳く箱り又よー一ツ
箱塚子花をまねはり

直よく居社文をまねはり箱塚

猿の画

まゆりの糸ハおまあ猿乃曲

猿骨の絵

そていみれあまきの骨や妖の目

兔の漢

何をや何ぞ見く居妖乃若

七五郎の漢

七葉に那子孫やうり 戸の致

枯木に鳥の渡

かゆき丸茶の味やうきよまを

多羽の渡

祢豆殿は同じ見やうやう祢豆

美草の葉のまに

ゆき渡ぬ葉や美草の暖より

西の秋の渡り

猿渡の家を足さうし 清水に

波の葉の雨よ

蕙ハ夫婦形やうやう 男渡

布袋の型を弾き馬よ

考の型に形やうやう 柳

水鏡の量に

痛入の玉を告げ 水鏡に

芭蕉の形よ

芭蕉ふふやたよ 廣くは物の本

江戸の湊

横手に紫山子 通くや江戸のそ

月花楼の湊

けうらよちと者つし 梅のを

猫の画子

うくおおれぬ 猫や火縫も 岡きぬ

白雨の思に

白田やちちをさ ぬくゆかきうよの

月の湊

一橋のちらに 思緒とちりく 柳

波呂貝の画子

そ何や波呂を ちりく 奇伝 貝

素良の玄梅をく 蕉扇 紙
差子 紙 一 ちりく の 図 を 換 け
大 軒 子 の 周 の 才 仁 師 弟 の 中
と 云 一 一 文 録 の 考 考 考

心人の生糸より糸の滑さを
よもぎもよもぎの
人くれば糸はあまのこ

風や夏より秋も好む

秋より春れは

十うづらの花はあまのこ

徳の恵

秋の山やあまのこ

秋の山やあまのこ

秋の山やあまのこ

秋の山やあまのこ

秋の山やあまのこ

秋の山やあまのこ

秋の山やあまのこ

秋の山やあまのこ

秋の山やあまのこ

秋の山やあまのこ

種もや秋の種も侍従の候

牛の雨よ

牛の背よと物秋とらや草の花

茶はほに

茶の香も髪よゆりやきりくは

うたといふれまの候

候よもるよれりや梅の女も

色石の候

晴くちの雨よこのま初しをれ

葉もぬの二見文臺ハ

西の浪れよきりくは

西の杖もや月日具

梅の影よ文危の影白

るまーん

それや梅もれりくは

晴もそのふり

月心の同を体とや何（五）

花の画子

花子此より一竹のまゝい

悼

夢と好歌人の才はうらむに

夢の苗は際しはるさぬまのりま宗

梅系り乃ちうらむれよ

梅の泣き何れ社のまどり

佛く乾くぬ袖れふきり

夢に梅つゝふ梅れあゝ

梅系り

（五）

はせふ日あつりる人のまへ

面白き終や極なり破るる路

蓮二坊を悼

月影をてんをほくもや栞の二燈

きよの地にふたもくきと
そ痛し人の日の一多にけそ
を云作し人のまへ

あはれそやそよあつりる心の方

あつりる栞はほりてそよと

辞せわれハ

そよの白いほりてそよの栞の心

蓮の系れまよやゆりぬれすこ

そよのまき枝はてふはれ水鶴の心

涼菴を悼

何ものけぬつりて何きあ

千長云を悼

あつりるそよの心やそよれ

舟の故郷も香しき夕
暮らきぬそのはるまのむらに
茶もよもふくくも何れに
神もよもふくくも何れに
のけ系仙のくくくくく

そとゆきみ月のきよの
鞠をぬれ人のきよに
えんを回へる丸か

夕年の俚子

暮の朝くくくくく
石てもゆきぬるそ
夢にまゝ包むその
まの意を伝へる人の
はくくく

同如く悔やみ程のむら
そき偲のきよに

（第廿）
やうに入れたのくくや、高の月

喪のねむる人のきへ

一系は日数昇一に柳一に
高ももみ林もも同のきえく系
くくぬきくくもくくく一高一水

書の前はうりりり

仲を現山よきけく甘言を

一日ふを振るくくくく

つよくしかけくまよのさよふき

本因をるくくくく

西うきぬくく

名本の流くくぬや一くく
かきくくくくぬと啼やなうく

富くぬ人のききうく

その中れ同じ依依外くく
けききくくくぬくく

（第廿一）

（第廿二）

○ 蘇下
妻の芳きうをれき一

かきあはれうらぬぬる境ふれ

昔ふくをなましや甲れ
りうきぬ衣いしつひしと

おかしあし

月をよりぬきしぬれぬ衣い

あまきとぬれぬ衣い

西うららに

水仙よりあゆめと有る白き

時をわらふや下木の底に奥

琴平門白首は帰縁自未れ

六月既り黄泉の孫に強く

そむよきとくつあつとく

すうとふくきく徳子居

比そあま洲し洞窟に記念

と行して何縁一紙をぬし

とらとを強き孫にすし

階をぬ縁を掃くあまき
あ、枯や山縁して時をん

こゝろふとく外々花をぬけ
実をぬけし〜

よのかぬえの涼しきふとく
ちかぬ人くまぬと情く
船をわねし〜

西行谷吟

平流の流いあしとて
そつハ初とつ〜
上人のゆゑにあつた
尾をたはしつ〜
尾をたはしつ〜
尾をたはしつ〜

（葉）

草子んよも雨よも水よも杖の友

母の身はよくあらん

男もにまをむしうねし杖よのらん

十のれ道ともわらしし中れき

父のむししをばらん

郭巨よハ似ぬ強毫の術る

蕨と人形形は中下も

祖又二十周

吾皇の夢又のちる中亦れ世

去るものいしはもとも夏あそ

深草元政の塚と指し

多れ認らんもろや竹の端牛

双林寺甚毒の石碑よ

石ふしの謎あやや何きん

（葉）

懐旧

糸苧の帳子と波の子と
人々も初むくまう夏あま
又のむくまうか
何とも嘆くんせりるるれ

曰るれ

暮れ出れ啼くはけりては秋を

母の忘り

秋もそく我いきるくきん

蕉子ぬの涙

去るれ泣きまうや水信を

あま懐旧

その人此懐く懐くや高れを

追加

二月月れ白とるれ

美りまよれ入も中よ〜〜にりた自

うれしほよふ〜〜

良儀の同よまゝ然いふに又た此川

跡の鳥角之通よふ〜〜

志の同よまゝとらさけ〜〜を 楓

祝考まぬ

るよも下も預言のぬれまゝりぬ

自述庵之記

予茲宗人ありて神河山の禪下
のうた又下は流しは雲の舟で流し
やうきうの地を流しは或ハ若法
時で極〜〜の流しを著しふと取
信宿〜〜をこの地を以て其
志ま〜〜は下や宗にあよ〜〜

唾りし十んき詞はゆるとくや
そききふふらん昔は情のこも
まろかしく四時を暮れで和むに
ほつと反古のけしよをなほり

山のすさむときれよよかろくく
あはれをくらふとくくあはれあ
消るんはけしほくもかへふ
あはれをくらふとくくあはれあ

いふかきし七世よふさふさ
何同よよとせれあふとす
よよきハ徳所のりあふそき
くもやあふ七又あはれを
あはれをくらふとくくあはれあ
風鈴の佳詞は涙眼をほり
あはれをくらふとくくあはれあ

Orzav

111

礎 文の心でやほし〜籠外れ牧草
よき言妹の髪で破れやよき海老
文の衣 度れ玉をさきよ〜古の息あで
走〜よか〜い〜い〜の老衲あり瑞れ
竹林よ〜い〜と〜い〜い〜心
ほりや〜い〜い〜い〜い〜い〜い
と〜い〜い〜い〜い〜い〜い

竹のよや〜い〜い〜い〜い〜い

ほきこのよき〜い〜い〜い〜い
れありあり〜い〜い〜い〜い
きき〜い〜い〜い〜い〜い
〜い〜い〜い〜い〜い〜い
ええぬ〜い〜い〜い〜い〜い
指の〜い〜い〜い〜い〜い
〜い〜い〜い〜い〜い〜い
〜い〜い〜い〜い〜い〜い
〜い〜い〜い〜い〜い〜い
〜い〜い〜い〜い〜い〜い

〇

〇

と行りよ美月の望ハ程念よあふ
根りしそ

狗中とわく移よの月
藤ハ何ウ獄何ウ吾とて囁けし
何あ〜〜とあ〜の色考とては
りよすによとあ〜つとやのあま
るや時言の念よか〜〜
後をふよあ〜〜てい〜のむ〜

そ耐れをきさくんよ移ソん
流の〜あれき〜ん〜あ
〜〜只〜中にあ〜と初
の画像よ何〜〜あ〜の〜
念〜い〜あ〜

叶けあれ是の何〜〜やう大蛇

